

## アウグステイヌス『告白録』第十一卷における「創世記」解釈と時間

田内千里

アウグステイヌスは「創世記」の註解を五つの著作において行っており、『告白録』第十一卷から第十三卷はその一つと数えられる<sup>1)</sup>。しかし、現代の研究において『告白録』第十一卷が取り上げられるとき、「創世記」解釈に関する部分が主たる考察の対象から外され、本巻第十四章十七節以下の「時間論」に集中して議論されることがある<sup>2)</sup>。また、時間を永遠との関わりにおいて主題化する研究においても、「創世記」解釈に着目しないものも多い<sup>3)</sup>。それに対して、加藤先生のご論考は、アウグステイヌスの論述に沿って第十一卷全体を考察対象とし、「時間とは何か」の問いを、「創世記」解釈を通じて、永遠との関わりにおいて探求されるものである。

『告白録』第十一卷では、「創世記」の冒頭の句、「初めに神は天地を創造された」が解釈されている。ここで注目すべきは、加藤先生が指摘されているように、この句が「ヨハネによる福音」のプロローグに結びつけられ、「ことば」における創造（ヨハ一・三参照）として読解されていることである。「それゆえ、あなたが語って、「それらのものが」創造されました。あなたはそれらのものを、ことばにおいて創造されました」<sup>4)</sup>。アウグステイヌスは、ヨハネに従って、時間的存在者と創造主の唯一の接点として「ことば」を置き、ここから「ことば」そのものの存在性格に迫ってゆく。この「ことば」は、時間的に語られる音節を持つ言葉ではなく、「神である」あなたに等しい永遠

なることば (verbum tibi coaeternum)』<sup>5)</sup>であり、そしてこの永遠なることばは万物が創造される以前に存在しているもの、つまり「先在」するものである。「あなたは時間において時間に先立つのではなく、……常に現在である永遠の高さによって先立つのです」<sup>6)</sup>。

「先在」については、「コロサイの信徒への手紙」(二・十五―十八)にも述べられており、本箇所はキリスト教神学においては創造と救済の一性を「先在」の「子」に基礎づける重要な言明である。しかし、アウグスティヌスはコロサイおよびパウロ思想の類似箇所からの引用と考察をしていない。第一の質問として加藤先生にうかがったのは、なぜアウグスティヌスはパウロではなく、ヨハネによって「創世記」を読解するのか、ということであった。

第二の質問は、時間論に関してであった。創造から終末までの「線的な時間把握」はユダヤ教とキリスト教に共通のものである。だが、キリスト教に独自の点は、イエス・キリストを中心にして、創造から終末に至る全時間を「救済史」として構成するところにある<sup>7)</sup>。キリストの一回限りの救いの業によって、それ以前の時代とそれ以後の時代は救済史の枠組みの中で、段階的な秩序を与えられ固有

の意義を持つことになったのである。アウグスティヌスが他の著作において示した時代区分(「律法以前」、「律法の下」、「恩恵の下」、「平安の内」)もキリストによる救いを中心とする視点から構成されている<sup>8)</sup>。『告白録』第十一巻においても、「……あなたが天と地を創造されたはじめから、あなたと共に永遠につづくあなたの聖なる御国の支配に至るまで、あなたの御法のうちにひめられたすばらしきものを考えたいのです」<sup>9)</sup>とアウグスティヌスは述べている。つまり彼は、天地創造からイエスの福音の中心にある「神の国／神の支配 (regnum Dei)」(マコ一・十五参照)に至るまでを、聖書のうちに記された神の救いの秘儀が、そこにおいて実現してゆく一つの《まとまり》、すなわち《時間》として把握しているのである。そこで、こうした時間理解を示した上で、世界内の時間に集中した議論(第十四章十七節以下)が展開されるのはなぜか、ということをうかがった。第十一巻全体において、時間論はそれに先立つ部分(第十三章十六節まで)とは異なり、純粹な哲学的考察としてのみ位置づけられうるのであろうか<sup>10)</sup>。

- (1) 五つの著作とは以下の通りである。De Genesi aduersus Manichaeos; De Genesi ad litteram liber unus imperfectus; Confessiones XI-XIII; De Genesi ad littellam libri duodecim; De ciuitate Dei XI-XII. Cf. Cornelius Mayer (Hrsg.), Augustinus –Lexikon: II, «Creatio, creator, creatura», 57-58.
- (2) Cf. Kurt Flasch, Was ist die Zeit? : Augustinus von Hippo, das XI. Buch der Confessiones, historisch-philosophische Studie, Text-Übersetzung-Kommentar, Frankfurt am Main, 1993; Dorothea Günther, Schöpfung und Geist. Studien zum Zeitverständnis Augustinus im XI. Buch der Confessiones, Amsterdam 1993.
- (3) Cf. C. Agustín Corti, «Ewigkeit und Zeit. Die Funktion der Ewigkeit für die Zeitanalyse des elften Buches der Confessiones Augustinus und ihre Rezeption durch Martin Heidegger» in Schöpfung, Zeit und Ewigkeit: Augustinus, Confessiones 11-13, Norbert Fischer/ Dieter Hattrup (Hrsg.), Paderborn/München/Wien/Zürich 2006, 29-49.
- (4) Aurelius Augustinus, Confessiones XI 5.7: Ergo dixisti et facta sunt atque in uerbo tuo fecisti ea. 願 兼 註 'Bibliothèque Augustinienne', vol. 14: Les confessions, VIII-XIII, Texte

de l'édition de M. Skutella, Introduction et notes par P. Solignac, Traduction par E. Tréhorrel et G. Bouissou, Réimpression de la 2<sup>e</sup> édition, Paris 1996 を使用し、以下、註における本書からの引用は、Conf. と表記する。日本語訳は、山田晶訳、『アウグスティヌス』(世界の名著)、中央公論社、一九六八年、および高谷宣史訳、『告白書』(キリスト教叢書)、教文館、二〇一二年を参照し、適宜、言葉遣いを変更やせついでたいた。

- (5) Cf. Conf. XI 7.9.
- (6) Conf. XI 13.16: Nec tu tempore tempora praecedis [...] sed praecedis [...] celsitudine semper praesentis aeternitatis.
- (7) Cf. Oscar Cullmann, Christus und die Zeit, Zürich 1948.
- (8) Cf. Aurelius Augustinus, Expositio quarundam propositionum ex epistula apostoli ad Romanos, 13-18.
- (9) Conf. XI 2.3: [...] et considerem mirabilia de lege tua ab usque principio, in quo fecisti caelum et terram, usque ad regnum tecum perpetuum sanctae ciuitatis tuae.
- (10) 上の註に同じく、願 兼 註。Christopher J. Thompson, «The Theological Dimension of Time in Confessiones XI» in Augustine: Presbyter factus sum, J. T. Lienhard et al. (eds.), New York 1993, 187-193.